

かりそめの婚約者のはずが冷徹上司の
一途な溺愛に包まれています

プロローグ 交渉という名の脅迫

誰にでも秘密はある。

——フライバシー保護が推奨されるこの時代、私は間違ったことをしていない……
正論で返せばそれだけのことだけど、簡単に割り切れないのが人間心理というもの。

六月中旬の日曜日。ホテルラウンジの奥まった席に座る板倉莉子は、奥歯を強く噛みしめると、小さなテーブルを挟んで対峙する男性を睨んだ。

前髪を右寄りのサイドに流して全体的にスツキリさせたヘアスタイルの彼は、大企業の御曹司という肩書きを失っても、モデルとしてやっていけそうなほど整った顔立ちをしている。

そして莉子が怖い顔で睨んでも、涼しげに微笑んでいるので腹立たしい。

今日の莉子は、大企業の社長令嬢らしく、長い髪を凝った編み込みにして結い上げ、清楚なデザインのワンピースを身に纏っている。

そんな装いに合わせた立ち振る舞いを心がけていたけど、もう我慢の限界だ。

「政略結婚なんて、私のキャラに合いません」

莉子は、心底イヤそうに言う。

もともと莉子は社長令嬢なんて柄じゃない跳ねっ返りな性格をしているし、相手は、己おのれの出世のためなら手段を選ばず、親族を失脚させることも厭いとわない冷徹な人物と噂されている御仁だ。

万が一にも縁談が進められてはたまったものではない。そう思つて睨にらみ付けているのに、向かいの彼は、奥二重おくふたえの切れ長の目を細めて意味深に微笑むだけだ。

「安心しろ、俺も君との政略結婚なんてお断りだ」

十分な間を置いてから、長い指で己おのれのスキリとしたフェイスラインをなぞつて彼が言う。

今年で二十八歳になる莉子に対して、確か彼は三十四歳。年齢差だけでなく、人間としての格の違いを見せつけるような態度が鼻につくけど、彼と意見が一致したのはなによりだ。

「では、双方円満な形での契約不成立ということだ」

早くこの場を立ち去りたい莉子は、テーブルに手をついて立ち上がろうとした。

すると彼が、莉子の手に自分のそれを重ねて動きを阻む。

「あの……」

莉子が不満げな眼差しを向けると、彼が楽しげにのたまう。

「結婚する気がないからこそ、君と婚約するのも悪くないかと思つてな」

矛盾した発言と、普段オフィスで見かけることのない彼の楽しげな表情に、莉子は脱力してソファに座り直す。

すると相手は、重ねていた手をどけてくれた。

「あの……、部長、プライベートと会社での態度が違いすぎませんか」

職場での彼の姿を思い出し、莉子はこめかみを押さえて唸うなる。

そんな莉子のツツコミにも、彼——小泉司こいすみつかさ冴は嬉しそうで、片方の口角だけ器用に持ち上げ、癖のある笑みを浮かべた。

「公私は、分ける主義だ。今の俺は上司としてではなく、泉ホールディングスの後継者として、イタゲンの社長令嬢である君に交渉という名の脅迫を持ちかけているのに」

——あ、ついに脅迫つて明言した。

心の中でツツコミを入れる莉子は、改めて自分と彼の社会的立場を確かめる。

「今さらになりますが、私、板倉莉子は大手塗料メーカーであるイタゲンの社長の娘です。そして小泉司冴さんは、泉ホールディングスの跡取り息子」

自分と彼の顔を指し示しながら、莉子は確認する。

莉子の父が社長を務めるイタゲンは、様々な特許を持つており、国内外で盤石の地位を築いている塗料メーカーだ。

跡継ぎとなる兄も優秀で、おかげで一人娘である莉子は、社長令嬢という肩書きに囚われることなく、かなり好き勝手にさせてもらっている。

といつても別に、親の権力を笠に着て、ワガママなお嬢さまとして傲慢ごうまんに振る舞っているわけではない。

ただ自分らしく生きたいと、日々模索しているだけだ。

莉子の確認に司冴は鷹揚に頷くと、莉子の動きを真似るように、お互いの顔を指で示す。

「そして普段の君は、泉ホールディングスの子会社、中小企業のM & Aを仲介する泉M & Aパートナーの社員で、俺はその直属の上司だ」

「そのとおりです。だから今回のお見合いは、お互いなかったことにして忘れましようと言っているんです」

娘の自主性を尊重してくれる両親のもと、普段はのびのび生きている莉子だが、時々社長令嬢としてのしがらみが付き纏うこともある。

今回のお見合いもそうだ。

普段から『板倉家の娘として……』と、莉子の自由人ぶりを嘆く父方の伯母に騙し討ちのような見合いを仕組まれてしまった。しかもその相手が、自分の直属の上司とは……

「こんな驚きの偶然、忘れられるわけないだろ」

「私だって、本気で忘れてもらえとは思ってません」

呆れる司冴に、莉子も呆れ顔で返す。

ただ、明日になれば会社で顔を合わせるのだから、その時はお互いこの件には触れず、今まで通りにしようと言っているだけだ。

——頭が良いのに、なんでそれがわからないの。

ぐぬぬっと齒ぎしりする莉子を楽しげに眺めて、司冴は「久我君」と、同じ部署に勤務する女性社員の名前を呟く。

「なんで今、彼女の名前が出てくるんですか？」

どちらかと言えば苦手としている社員の名前に、莉子が眉根を寄せると、司冴は弱点を見つけたとばかりに目を弓なりにする。

「いや、彼女が板倉君の素性を知ったら、どんな反応をするか想像して楽しんでいるだけだ。ついでに、俺が君にフラれたと彼女に話したら……」

後はご想像にお任せしますとでも言いたげに、司冴は肩の辺りで両手を開く。

——あ、悪魔。

『久我君』こと久我美咲は、泉ホールディングス重役の娘で、司冴にご執心なのは周知の事実。

彼女は、虚栄心が強い上に粘着質で、一度敵と定めた相手は、ネチネチと絡んで追い詰めない気が済まない性格の持ち主である。

ただでさえ関わりたくないタイプな上に、莉子は、ある件をきっかけに彼女に目の敵にされている。

そんな彼女にこちらの素性を知られた上に、司冴と見合いしたなどと知られたら……

「面倒なことになります」

莉子の答えに、司冴が正解とばかりに音を立てずに拍手する。

「と言うわけで、俺と結婚を視野に入れたお付き合いをやらをしてみないか？ 泉ホールディングスの利益に繋がる大企業のご令嬢と交際を始めたと言えば、俺も久我さんに、娘さんとの縁談を諦めてもらえるだろう」

司冴が言う『久我さん』とは、先ほど話題に上った久我の父親のことだ。泉ホールディングスからの出向という形で泉M&Aパートナーに籍を置く司冴にとって、上司にあたる。

役職は確か、取締役だったと思う。

どうやら彼は、久我親子の扱いに苦慮しているらしい。

それには同情するけど、そこに莉子を巻き込むのはやめていただきたい。

「私へのメリットが感じられません」

莉子がキツパリ断言しても、司冴の態度は変わらない。

ソファアに背中を預けて、優雅な動きで長い足を組み替える。

王者の風格を纏う彼を見れば、この場の主導権がどちらにあるのか一目瞭然だ。

それでも、あつさり屈してなるものか——そんな思いで、莉子は見目麗しい御曹司を睨み、こんな状況に陥った経緯を思い出す。

1 令嬢は乙女な夢を見る

六月最初の金曜日。自身が勤務する泉M&Aパートナーのオフィスでプレゼン資料の制作にあたっていた莉子は、「なにこれ！ 頭悪すぎ」という、独り言として聞き流すには大きすぎる女性の声に顔を上げた。

「ちよつと中野さん、この業績推移のグラフ、意味わかんないんだけど」

底意地の悪さを滲ませた粘着質な声が続き、莉子は内心、またかと嘆息した。

視線を向けると、名前を呼ばれた『中野さん』こと中野ひかりが、「すみません」と、謝りながら声の主のもとへと駆けていく。

中野に声をかけた女性、久我美咲は、その姿に嬉しそうに口角を上げる。

久我は目鼻立ちがハッキリしていて、自分の顔の長所を際立たせるメイクも上手い。

間違いない美人の部類に入るのだろうけど、捕らえた獲物をいたぶる猫のような笑顔をさせる彼女を、莉子は美しいとは思えない。

チャリと窓際のデスクに視線を向けてみたが、案の定、その席の主である部長の姿はない。

——小泉部長がいる時は、久我さんもあんな言い方しないもんね。

久我は、この部署の主である小泉司冴部長にご執心なので、彼の前ではしおらしく振る舞うのが

常だ。

恐らく、かなり無理してキャラを作っているのだろう。司冴がいないところでは、立場の弱い社員をいじめて憂^{うれ}さ晴らしをしている。

「ど、どこでしょうか？」

おどおどしながら聞く中野に、久我はパソコンのモニターを示して「ほらここ、小数点以下が抜ける」と尖った声を出す。

「それは……このグラフが、小数点以下がゼロだと表示されないだけで……」

「はあ？ なに口答えしてるの？ だったら、ゼロでもそれが数字として表示されるよう調整しなさいよ」

「そのやり方が、わからなくて」

「へー、わかんなかったら、そのままにいいんだ。中野さんにとって仕事って、知らなければほったらかしにしている程度のものなんだ」

「そ、そういうわけじゃ……」

「じゃあそれ、ただの言い訳じゃない。なに言い訳してるの。ホント、使えない」

久我はこれ見よがしなため息をつく。

ここまで来たらパワハラなのだけど、彼女の父親が、泉M&Aパートナーの親会社である泉ホールディングスの重役なためか、中野が度々同じような過ちを繰り返しているからか、周囲は遠巻きに様子を窺^{うかが}うだけだ。

中野の方はと言えば、問い詰められて黙^{もく}って俯^{うつむ}くだけだ。反省しているのかいないのか、そんな彼女の反応に、久我の嫌味が加速していく。

そのせいで、オフィスにいる全員が居心地悪そうにしている。

——もう限界。

莉子はマウスを数回クリックすると、デスクに手について立ち上がった。

「中野さん、こっち来て。やり方教えるから。ついでにグラフの作り方指導したいこともあるから」

自分が口を挟むことで、中野が今以上に久我に目をつけられてもいけないと思い様子を見ていたが、これ以上この場の空気が悪くなるのは耐えられない。

久我が楽しい時間の邪魔をするなどこちらを睨^{にら}むが、知ったことではない。莉子は涼しい顔で続ける。

「久我さん、今、メールで私の作成した資料を送ったので確認をお願いします。この後の打ち合わせで使うので、すみませんが、そちらを優先してもらっていいですか？」

莉子の発言を機に周囲の緊張した空気が緩むと、久我は聞こえよがしな舌打ちをする。

「なにあれ、偽善者面で好感度稼いで、あざとすぎるんだけど」

誰にともなくそんな嫌味を言いながら、パソコン画面に顔を寄せる。

嫌味を言うターゲットを莉子に切り替えて、入念に資料のあら探しをするつもりなのだろうけど、その辺はぬかりない。

——それ、今日一緒にプレゼンに行く小泉部長に、既に確認してもらっているんだよね。
莉子は心の中でチラリと舌を出す。

それでももしミスが見つければ、部長を道連れにすればいい。
彼の名前を出せば、さすがの彼女も黙るだろう。

そんなことを考えていると、中野が自分のもとに来了。莉子は椅子に座り直して、中野にもちようど空いていた隣の椅子を勧める。

仏頂面の中野は、久我に聞こえない声で「あの人、性格悪すぎ」と、不満を零す。

莉子はその言葉には反応を示さず、デスクの一番大きな引き出しからテキストを取り出して広げた。

「同じものを新人研修でもらったと思うけど、わかりにくいところに私なりの書き込みがしてあるから、良かったらこれを参考にして」

必要な箇所を示し、実際にパソコンを操作しながら中野に説明をしていく。

「この詳細設定を開いて表示形式を……」

これは以前にも中野に説明したことがある。

その際にも彼女は画面を見て頷くだけで、メモを取ることはなかった。

もしかして、なにをどうメモすればいいのかわからないのかと思う、自分のテキストを開いて見せたのだけれど、中野がそれを参考にする様子はない。

画面を見て、ただ頷くだけである。

——どうしようかな……

しばらく説明しても中野が理解しているのかどうか、手応えがない。

「中野さん、もし覚えられないならメモを取った方が……」

莉子は自分のボールペンを彼女に貸そうとした。だが指が滑り、手にしたつもののボールペンが床に落ちた。

カシャンツと、小さな音を立てて、ボールペンが床を転がる。

——しまった。

莉子は左手でデスクに掴まりバランスを取ると、椅子に座ったまま前屈みになり、右腕を伸ばす。でも莉子の指がボールペンに触れるより早く、誰かの手がそれを拾い上げた。

節が目立つ男性的な手の持ち主は、ボールペンを拾った後でわざわざしゃがみ込んで莉子の視界に入ってきた。

高い鼻梁にスッキリした輪郭の男性で、細い金属フレームの眼鏡に縁取られた切れ長の目は涼しげだ。かなり整った顔立ちをしていて、一見中性的に見えるけど、キリリとした眉や鋭い眼光が、ソフトな印象を中和している。

見るからに切れ者といった雰囲気（めいふき）を漂わせる彼を見て、莉子は頬を引きつらせた。

「こ、小泉部長……」

いつの間に戻ってきたのか、司冴は、中途半端な姿勢のまま硬直する莉子の姿に大きなため息をつく。

「板倉君、君は視野が狭すぎる。もう少し落ち着きを持った振る舞いを心がけてはどうだ？」
その忠告に、久我がこれ見よがしに嘖き出す。

「すみません」

確かに横着をして、座ったままボールペンを拾おうと目一杯腕を伸ばした姿は少々滑稽だ。
気恥ずかしさを覚えつつ莉子が姿勢を戻すと、司冴は拾い上げたボールペンを莉子のデスクに置いた。

「少し早いが、打ち合わせに向かいたい。準備はできているか？」

その言葉に、莉子は素早く思考を切り替える。

「大丈夫です」

答えてから、中野をチラリと見た。

中野はと言えば、このやり取りには興味ないといった様子で自分の爪を見ている。

本当はもう少し説明しておきたかったけど、彼女への指導は後日で構わない。

とりあえず、自分で努力してみてほしいという気持ちもあり、莉子は自分のテキストを彼女に差し出す。

「私はもう頭に入っているから、このテキストは、しばらく中野さんが持っていて。自分なりにやってみて、わからないことがあればいつでも質問してね」

そう言っ、莉子は手早く外出の支度を整える。

立ち上がるついでに久我に視線を向けるが、なにか言ってくる気配はないので、資料にミスはな

かったのだろう。

莉子は資料とパソコンを入れたバッグを肩に掛けて、先に身支度を済ませて自分を待つ司冴の後に続いた。

「さっきなぜ中野君に指導をしていた？」

会社を出ると、並んで歩く司冴に聞かれた。

「少し、グラフの作り方で説明したいことがあって」

「どうせまた、久我君と中野君が揉めていて、君が助け船を出したんだろう」

「……」

なかなか鋭い指摘に、莉子は視線をさまよわせる。

それだけで回答になったのか、司冴は大袈裟にため息をついた。

「あの二人の揉めごとに、君が口出しする必要があったのか？」

「はい。ありました」

莉子が迷いのない口調で断言しても、司冴の冷ややかな態度は変わらない。

「確かに久我君の言い方に問題はあがあるが、中野君が何度同じ指摘を受けてもそれを聞き流して改善しないのも事実だ。久我君の性格上、中途半端なところで説教を遮れば消化不良のイライラが続くし、君が一段と目の敵にされるだけだろ。その辺も考えてから行動すべきだ」

続けられた小言で、先ほどの彼の『君は視野が狭すぎる』という言葉に、中野をフォローしたことが含まれていたと気付く。

莉子が、隣を歩く上司をチラリと見上げると、目が合った彼は微かに眉尻を下げる。文句があるなら受けて立つとでも言いたげだ。

——広い視野で状況を判断できて、しかもイケメン。まさに完璧御曹司。

莉子がそんなふうに思うのには、わけがある。

二人が勤務する泉M&Aパートナーの主な業務内容は、経営者の高齢化などで事業の存続が困難な企業を、新たなオーナーに引き継ぐ、いわゆるM&Aの仲介だ。

親会社は多角経営によってグローバルに展開している泉ホールディングスで、この司冴は、その泉ホールディングス社長の一人息子なのだ。

そんな彼は半年前から社会勉強のために、親会社から泉M&Aパートナーに出向している。

出向してくる前から、彼は出世欲が強く、本社の一部の社員には「冷徹御曹司」と呼ばれているなどという噂は耳にしていた。

損得勘定抜きで思ったことは即実行する莉子と違い、司冴は常に冷静で、感情的になることなく先を読んでから行動に移すタイプだ。

冷静沈着、私情に流されることなく、行動に無駄がない。

莉子とは対極的な性格をしているため、二人は毎日のように、些細な意見の対立を繰り返している。

——とはいえ、噂に聞いていたほどの悪人とも思えないけど……

莉子は横目で司冴の様子を窺う。

司冴が泉ホールディングス勤務時代に、今後の出世の妨げになると、彼のいここにあたる社員を失脚させたという話は、泉M&Aパートナーにまで届いていた。

かなり信頼できる筋からの情報のため、それほどの冷徹御曹司が部長に就任すれば、どんな無理難題を押し付けられるかと怯える社員もいたが、今のところ暴君といった雰囲気はない。

日々淡々と情報を分析して、采配を振るっている。

どうやらこの御曹司は、敵に回すと厄介だが、上司としては大変頼りになるらしい。

そして、将来的に泉ホールディングスに戻る予定の司冴としては、重役の娘である久我に配慮する必要があるのだろう。

だけど一社員として働く莉子には関係のない話なので、彼の価値観を押し付けられても困る。

「間違つてなければ正解……というわけじゃありませんから」

確かに中野は些細なミスを繰り返しているし言い訳も多い。だからといって、見せしめのごとく久我が攻撃する様子を、莉子は見過ごすつもりはない。

久我と中野がやり合うことで、部内の空気が悪くなるのも嫌だ。

莉子の反論に、司冴は小さくため息を漏らす。

彼とこの手の会話をするのは、これが初めてではない。

敵対するほどではないが、模範的な振る舞いができる大企業の後継者である彼と、社長令嬢にしては少々跳ねっ返りな莉子では、本質的な価値観が合わないのだ。

「自己犠牲を美德と思っているのかもしれないが、他人の揉めごとに首を突っ込んで君が板挟みに

なる必要はない」

司冴は呆れ顔で言う。

損得勘定がしつかりしている彼からすれば、莉子一人が損をしているように見えて気になるのかもしれないが、そんなことはない。

「自己犠牲とか、そんな立派な話じゃないですよ。私は自分のために行動しているだけです」

「どこが？ もともと久我君が板倉君を目の敵にするようになったのも、君が周囲を代表して彼女に注意をしたことにあると聞いている」

司冴は納得のいかない眼差しを向けてくる。

それは、司冴が泉M&Aパートナーに赴任してくるより前の話だ。

久我が周囲の忠告を無視して独断で進めた商談で、クライアントに多大な損失を出させたことがあった。そうなった途端、久我は『私が失敗するなんてありえない』と言い張り、他の社員に責任をなすりつけようとした。

彼女の父が泉ホールディングスの重役ということもあり、事なかれ主義の前部長は、おとなしい社員に全ての責任を押し付けることでその場を納めようとした。

だけど莉子はその流れに納得できず、『失敗しない人間なんていません。本気でそう思っているなら、それはフォローしてくれた人に感謝さえできない愚か者の証です』と、久我に抗議し、これまでの議事録をもとに彼女にミスを認めさせたのだ。

結果、莉子は久我に逆恨みされ、今日に至る。

誰かからその話を聞きつけた司冴には、莉子が損な役回りを買って出ているように見えるのかも知れないが、それは違う。

「幼馴染みにも、よく『面倒見がいい』と言われるんですけど、私はただ、行動しないことで、後で自分が後悔するのが嫌なだけです」

だからミスが多い後輩が先輩に嫌味を言われていればフォローするし、ミスを減らすためのサポートもする。そうすることで、職場の空気が陰悪になるのを抑えられるのであればいいではないか。

プライベートでも同じようなもので、後で自分が後悔するのが嫌で、あれこれ人の世話を焼いてしまうだけである。

そんな莉子の本質を理解している家族は、よく『莉子の漢字は“利己的”の“利己”で良かったかもしれない』と言っている。

そんなことを笑い話として伝えた後で、莉子は付け足す。

「それにさっきのあれは、私なりに仕事の効率化を考えてのことです」

「あの資料は、既に私のチェック済みだ」

駅が近付いてきてスマホを取り出す司冴が、眼差しで『いい加減なことを言うな』と、言外に窘めてくる。

それには気付かぬフリで、莉子は言い返す。

「久我さんが不機嫌を撒き散らす時間を、再チェックに充てられたのだからラッキーだと思います

んか？ それに中野さんにしても、怒られている時間があるなら、次こそ言い訳しなくていいように仕事を覚えてもらった方が生産的です。それに職場の雰囲気も良くなります」

「結果、仕事のできるスタッフの時間を取られる方が非効率だ。君に任せてあるプレゼン資料はどうなっている？」

駅の改札を抜けながら、司冴が「だから視野が狭いと言っているのだ」と、ため息をつく。

つまり彼は、莉子の能力を評価して、戦力に数えてくれているということだ。

価値観が合わないだけで、莉子も彼の仕事の能力は高く評価しているので、そういう人に自分を認めてもらえるのは素直に嬉しい。

続いて改札を抜けた莉子は、それでつい「もう仕上がっていますので問題ありません」と、小さな嘘をついてしまう。

実は中野の指導に時間を取られて、まだ途中だ。

——この後、オフィスに戻ったら片付けられるよね。

今日は仕事帰りに、幼馴染みでもある女友達と飲む約束をしているので残業はしたくないが、戻ってから残りを片付ければなんとかなるだろう。

「部長はプレゼンの後、泉ホールディングスに向いて直帰されますよね。月曜日の朝、確認をお願いします」

そのため、莉子が一人で資料を持ち帰ることになっている。

「わかった。もし残業するなら、ちゃんと時間はつけるよ。不毛な争いで作業効率を下げることに

賛同する気はないが、自己犠牲で問題を解決することを認める気もないからな」

莉子の嘘をあっさり見透かし、司冴が釘を刺す。

——あ、完成していないのバレてる。

つくづく視野の広い上司である。

なにか反論しようとしたが、その時、ちょうど電車がホームに入ってきた。

停車音やホームアナウンスに声をかき消された莉子は、微妙な気まずさを抱えたまま、彼と一緒に電車に乗り込んだ。

どうにか定時で仕事を終えた莉子は、友人との待ち合わせ場所である「花いち」という和カフェを兼ねたダイニングバーを訪れていた。

入り口が見渡せるボックス席を陣取り一息ついていると、ほどなくして幼馴染みの橋詰舞菜香が戸口から顔を覗かせる。

「舞菜香」

莉子が通路に顔を出して合図すると、相手も弾けるような笑顔で手を振る。

舞菜香の家も以前は会社経営をしていたが、彼女が中学生の時に、社員の不正がもとで倒産した。それにともない舞菜香は、それまで一緒に通っていた私立校から公立校に転校したが、そんなことくらいで自分たちの関係は変わらない。

幼少時代から大人になった今でも、お互いのことを親身に思い合う仲だ。

「莉子」

店員に連れであることを合図して、舞菜香が向かいの席に腰を下ろす。

「いい雰囲気のお店だね」

莉子の褒め言葉に舞菜香が「でしょ」とはにかんだのは、この店の内装を彼女が勤めるデザイン会社で請け負ったからだ。

「誕生日のお祝いに今日は奢るから、好きなの頼んでね」

今日は一週間前倒しで、舞菜香の誕生日を祝うために集まった。

莉子の誕生日は十二月で、その際には舞菜香が同じように祝ってくれる。

長年気兼ねない付き合いを続けられる友達存在を心地よく感じながら注文を済ませ、料理を待つ間、世間話をして楽しむ。

付き合いが長いだけに、現在進行形の舞菜香の恋人の話に始まり、同級生の思い出や仕事の話など、話題が尽きることはない。

ただいつもに比べて、舞菜香の表情が冴えない気がする。

「舞菜香、どうかした？」

——もしかして、彼氏に浮気されたとか？

舞菜香の現在の恋人にいまいち好感を持てずにいる莉子としては、まずそう思わずにはいられない。

「ごめん。なんでもない」

舞菜香は軽く首を振って、不器用に笑う。

どこか憂いのある表情が気になるけど、本人が話したくないことを無理に聞き出すつもりはない。大事なのは、相手が助けを求めてきた時に迷わず手を差し伸べることだ。

——そんなことより、今日は舞菜香の誕生日を祝うために集まったんだから。

気持ち切り替えた莉子は、運ばれてきた料理を取り分けたタイミングで、彼女への誕生日プレゼントを取り出す。

「さてと……はい、これ」

ふんわりとしたオーガンジューのリボンが掛けられたプレゼントを前に、舞菜香の表情が和らぐ。そのことにホッとしつつ中身は香水だと話していると、店に男性客が入ってきた。

——小泉部長？

どこか見覚えのある顔に見えて、一瞬そう思ったが、よく見れば少しも似ていない。

どちらも長身で整った顔をしているという意味では同じなのだけど、生真面目で隙がなく近寄りがない印象の司冴に比べて、今店に入ってきた男性は、華やかで遊び慣れた伊達男といった雰囲気だ。

眼鏡を掛けていないし、髪型も全く違う。

それなのにそんな錯覚を覚えたのは、店に入ってきた彼が、司冴と同じ一種独特の空気を纏っていたからだ。

そこにいるだけで人を惹きつけるほどの強烈な存在感。

それでつい目が離せなくなっていると、相手が『あつ!』という表情を見せた。

「えっと……イタゲンさんの……」

そのまま歩み寄ってきた男性が、莉子の父が経営する会社名を口にしたことで、彼が誰なのかを思い出す。

「板倉莉子です。ハイバラ電気の榛原裕弥さんですよ。時々、パーティーなどでお見かけしています」

基本、家柄に縛られることなく自由に生きていきたいと思う莉子だけど、家族を疎んじているわけじゃない。

家の品位を落とさないよう状況をわきまえ、社長令嬢らしく振る舞うべきところではそのように対処することになっている。

特に、彼の家が経営するハイバラ電気とイタゲンはビジネス上の付き合いがあるので、失礼があつてはいけない。

「そうだった。失礼」

立ち上がり、そのない微笑みを添えて挨拶する莉子に、相手も社交辞令とわかる範囲の親しみを込めた笑顔を見せる。

その流れでいくつか言葉を交わしていると、舞菜香も彼と面識があるようだったので世間の狭さに少々驚く。

——こういうの、少しだけ息苦しいな。

社交的な挨拶を済ませて座り直した莉子は、内心で嘆息する。

幸いにも莉子の父である板倉篤は、世間体を気にすることなく、娘の自主性に任せてくれているが、それでもどうしたって、イタゲンの社長令嬢という肩書きはついて回るのだ。

今の裕弥とのやり取りくらいなら構わないが、中にはイタゲン社長との繋がりが欲しくて、莉子に媚びてくる者もいるので煩わしい。

舞菜香の今の恋人も、そういったタイプの人らしく、舞菜香の目を盗んで莉子に必要以上に媚びてきたことがある。

もちろん、けんもほろろに誘いを断ったし、それ以降も舞菜香のことは大事にしているようなので口出しはしていない。だが、莉子としてはそんなことがあったので彼に好感を持てずにいる。

——小泉部長くらいできた人間になると、こういうことで悩まないのかな？

舞菜香とたわいない話をしながら体をねじって裕弥の背中を見送っていると、ふとそんな考えが頭を過った。

そして一拍おいて、さつき裕弥と司冴を見間違えたことが、なぜだか妙に腹立たしくなる。

——なんで私がこんなに小泉部長のことを思い出さなきゃいけないのよ。

上手く消化できない感情を持て余した莉子は、舞菜香へと向き直ると、「舞菜香、彼に口説かれたでしょ」と、揶揄してみた。

「はいッ!? 急に変なこと言わないでよ」

唐突な発言に舞菜香は目を丸くする。

幼馴染みの素直な反応に心癒やされつつ、「だって彼、女慣れした遊び人として有名だから」と、出所もハッキリしない噂を根拠にそのまま話を広げていく。



舞菜香との楽しいひと時を過ごした翌日。

昨夜のアルコールの余韻を引きずった気怠さから、莉子は休日なのをいいことに惰眠を貪っていた。

半分覚醒しているような心地よい眠気にたゆたっていると、リンゴンと古めかしいベルが鳴る。

板倉家の玄関チャイムの音だ。

——宅配便かな？

週末は家政婦も休みだが、他の家族がいるので問題ない。

空腹感もあるにはあるが、もう少し寝ていたいと枕を抱えて目を閉じた時、階下から「突然お邪魔してごめんさいね」と、陽気な女性の声が聞こえてきた。

「……ッ」

——失敗した。遊びに行けば良かった。

枕を抱きしめて後悔してももう遅い。

ほどなくしてドアをノックする音が聞こえる。

「起きてるんだろ？ 美和子伯母さまが呼んでるぞ」

こちらの返事を持たずにドアを開けた兄の板倉誠一が、朝の挨拶もなく用件だけを告げる。

父方の伯母である成宮美和子は、他家に嫁いで三十年以上経った今も、時折予告なしに里帰りをする。

莉子も誠一も、おおらかで面倒見のいい伯母の人柄を慕っているので、いつもは歓迎するのだけど、最近は少々事情が違う。

「体調悪くて横になっているって言ってよ」

莉子は、むくりと顔を上げて兄に頼む。

「昨日、友達と夜遊びしてたってチクってある」

「えっ！　なんでそんなこと言うのよ」

抗議する莉子に、誠一がペロリと舌を出す。

「冗談だ。今日伯母さまが来た目的はお前だから、顔を出すまで帰らないぞ」

誠一は、笑い声を残して部屋を出て行く。

年の離れた兄は、外では仕事のできる切れ者として評価されているらしいが、家ではいつまでも悪ガキっぽさが抜けないので困る。

兄の冗談のせいですっかり目が覚めてしまった莉子は、渋々ベッドを抜け出して身支度をした。

莉子が二階の自室を出て階下のリビングに行くと、ジャカード織りが美しいクラシカルなデザイン

ンのソファで、着物姿の年配女性がくつろいでいた。

ふつくらとした面差しの彼女は莉子に気付くと微笑んだ。

目尻に年相応な皺しわが刻まれているが、それでも名家のお嬢さまとして育ち、資産家の夫に嫁いで二人の息子にも恵まれて……と、大きな苦労もなく過ごしてきた彼女には色褪あせない乙女のような愛らしさがある。

「美和子伯母さま、お久しぶりです」

「莉子さん、ピアノの練習を邪魔してごめんなさいね」

ピアノなんてもう何年も触っていないが、どうやらそういうことになっているらしい。

そのわりに、演奏の音が聞こえなかったなどと疑問に思わない伯母のおおらかさに感謝しつつ、曖昧あいまいに頷いておく。

リビングには、美和子の他、莉子の両親の姿もあった。

父の篤は、莉子と目が合うと困り顔で肩をすくめたので、それだけで伯母の来訪の目的は察せられる。

というか、テーブルの上に置かれている装丁が立派なアルバムを見れば明白だ。

「それで、今日はどうぞされたんですか？」

莉子が伯母の対角線上に配置されたソファに座ると、母の板倉彩音あやねは「莉子のお茶の用意をします」とその場を離れる。篤も「手伝うよ」と、それに続く。

——私のお茶の準備に、二人もいららないでしょ。

莉子が心の中でツツコンでいると、紅茶で喉を湿らせた美和子が、コホンツと小さく咳払いをして莉子を見る。

「莉子さん、変わらず仕事に励はげまれているということですね。裕福な家庭に生まれたからといって家事手伝いに甘んじることなく、社会に出て働くという志は伯母として誇らしく思っています」

「それは……どうも、ありがとうございます」

警戒しつつもお礼を言う莉子を相手に、軽やかな口調で語る美和子が「ただ……」と、言葉を続ける。

「時代がどれだけ変わっても、変わらない幸せもあります」

——来た。

身構える莉子の方へと、美和子はテーブルに置かれたアルバムを押し出す。

「人は一人で生きていけるほど強い生き物ではありません。私は伯母として、可愛い姪の幸せを心から願っているのよ」

真面目な顔で話す美和子は、莉子に中を見せるべくアルバムを開く。

そこにはこちらの想像どおり、誠実そうなスーツ姿の男性の写真と、見事な学歴に始まり華々しい職歴や家族構成が綴られた文章が添えられている。

いわゆるお見合い写真と釣書というやつだ。

今回、それが三点ほどある。

「忙しいあなたの代わりに、これはという殿方を厳選してきました。今度こそ、莉子さんのお眼鏡にかなう方がいると思うわ」

自信たっぷりの美和子の言葉に、莉子は軽い目眩^{めまい}を覚えた。

——このやり取り、先月も先々月もやったよね。

その際、まだまだ結婚は考えていないと丁重にお断りしたのだけれど、美和子は諦めていなかったようだ。

なんというかこの伯母は、本気で『女の幸せは結婚にある』と信じて疑っていないのだ。

時代の流れにそぐわない価値観を堂々と主張できるのは、それだけ彼女が幸せな結婚生活を歩んできた証と言える。

姪として、それは嬉しいのだけれど、莉子の価値観には合わない。

「伯母さま、前にも話しましたが、今は仕事が忙しく、父も母もその辺は私の好きにすれば良いと言ってくれていますので」

「その話は前回断られた時に聞きました。だからこそ選び直してきたんです」
「うっ」

「先方はどのお宅も、ウチや板倉家と縁続きになれることを喜んでいて、もし結婚しても莉子さんに退職を求めたりしないと約束してくださっているわ」

無邪気な美和子の言葉に、莉子は肩を落とす。

イタゲンが特殊塗料メーカーとして大きく飛躍したのは、父が社長に就任してからだが、それま

でもそれなりに歴史ある名家ではあった。

そういう家同士の繋がりを重んじて成宮家に嫁いだ伯母は、板倉家の後ろ盾もあって、嫁いびりなど受けることなく幸せに過ごしたのだろう。だけど莉子はその部分が引つ掛かる。

——この人たちは、私と結婚したいわけじゃない。イタゲンと縁戚になりたいだけ。

そう思うと、どれだけ好条件の縁談でも色褪^あせて見える。

らしくない乙女心と笑われると恥ずかしいので言葉にはしないが、莉子としては、長い人生を共にする相手には、板倉莉子一個人を愛してほしいのだ。

妄想全開で希望を述べていいのであれば、一目見た瞬間にお互い恋に落ちて、強い絆を確かめた後で莉子の素性を明かし、それまでと変わらぬ愛を誓っていたくのが好ましい。

——私、無駄に乙女。

自分でもその点に関しては苦笑するしかないが、それでもまだ結婚に現実味がないだけに、ついあれこれ夢想してしまう。

莉子はとりあえず、釣書に目を走らせてすぐに閉じる。

「伯母さま、すみません。この中に、私が会いたいと思える方はいませんので」

莉子の言葉に、美和子はふうと息を吐く。

「そう。こればかりは無理強いるわけにはいかないし、仕方ないわね」

——あれ？ 珍しい。

あつさり見合い話を引つ込める美和子の態度に、莉子は小さく驚く。

これまでの彼女は、『女性の幸せは結婚にある』という自分の考えに絶大な自信があり、姪の幸せを願っているからこそ、なかなか引き下がってくれなかったのに……

「主人にも、今は時代が違うから、形式張った見合いを勧めるのでは駄目だって叱られたのよ。自然と関心を持てる相手と巡り合わせるくらいに留めなさいって」

美和子は、頬に手を添えてため息を漏らす。

どうやら今回の見合い話は、ダメモトで持ってきただけのものだったらしい。

「そうですね。こういう形式張った見合いは、私の性格には合いませんので」

あっさり引き下がってもらえたことに安堵する莉子に、美和子は「ところで」と、話題を変える。

「莉子さん、来週の日曜日は、なにか予定があるかしら？」

「来週ですか？」

金曜日は空けておきたいが、土日は特に予定がない。

それをそのまま告げると、美和子が表情を輝かせる。

「じゃあ日曜日、私の観劇に付き合ってくれない？ 一緒に行くって言っていた人の都合が悪くなって、チケットが余っているの。観劇の後で、お礼に美味しい食事をご馳走するから」

美和子が手を合わせて可愛くお願いしてくる。

彼女の趣味は観劇で、特に女性のみで構成されている歌劇団の大ファンで、ファンクラブにも入っている。

他の家族は興味がなく、好きにすればいいけど巻き込まないでといった感じだ。

そのためこういったことはままある。

莉子も、歌ありダンスありの華やかな舞台を見るのは好きなので、嬉しいお誘いだ。

なんなら、莉子の乙女な部分は、この伯母の影響が大きいだろう。

「はい、喜んで」

興味のない縁談を持ってこられるのが嫌なだけで、伯母のことは大好きなのだ。

莉子が笑顔で承諾すると、そのタイミングを見計らったように両親も戻ってきた。

「じゃあこの後、来週着ていくお洋服を一緒に買いに行きましょう。私に服を選ばせて」

ご機嫌な様子で美和子が提案する。

彼女には娘がいないので、着せ替え人形のごとく、莉子に自分好みの服を着せたがる。

「あら、いいわね。お義姉さんに服を選んでいただくと、莉子の印象がガラリと変わるから、見ていて楽しいわ」

母の彩音も話に参加して、この後三人で買い物に行こうと話を^{まじ}纏める。

それはよくあることなので、莉子は伯母と母の意味深な目配せを気に留めることなく出かける準備に取り掛かった。

2 利己的な願い

翌週の日曜日。

美容院で身支度を整えた莉子は、伯母との待ち合わせ場所である劇場へと急いだ。

先日の買い物で美和子を選んだのは、ハイウエストな位置に切り替えがあり、裾がふわりと広がっているワンピースだった。

白地に細かな花の絵柄が散らされたワンピースに、淡い桜色のカーディガンを合わせている。

伯母好きな清楚な装いで、せっかくだからと彩音が行き付けの美容院にメイクとヘアセットの予約を入れた。

結果、普段は自然なままに遊ばせている髪は凝った編み込みに結い上げられ、顔には完璧なメイクが施されている。

機能性重視のラフな服装にナチュラルメイクという普段の莉子しか知らない人が見れば、まず本人とは気付かないだろう。

「伯母さま、お待たせしてすみません」

劇場ロビーの売店で伯母の姿を見つけた莉子は、足早に駆け寄る。

「ここのなら、何時間待たされても平気」

今日も着物姿の美和子はウフフと笑い、手にしていた商品を棚に戻してその場を離れる。

「それに、今日は開演直前に劇場での待ち合わせにしましょうと提案したのは、私の方よ」

そんなことを話しながら客席へと向かう。

莉子が美容院に行くこともあり、美和子が、指定席なので焦る必要はないと言ってくれたのだ。

思いのほか髪セットに時間を取られ、開演ギリギリの到着となったので、伯母の配慮はありがたい。

そのまま美和子は、ドアを開けるついでに莉子の方へ振り返る。

「そうそう、今日の観劇、隣のシートが私の知り合い親子なの。篤の会社とも付き合いがあるかもしれないから、挨拶だけお願いね」

「そう……なんですね」

ファン友達と予約のタイミングが合って、隣の席が取れたのだろうか。

できれば先に言っておいてほしかったけど、まあ仕方ない。

館内は既に暗くなり始めているし、劇が始まれば会話をする必要もないのであまり気にしないでおこう。

なんとなく伯母と同世代の女性と、その娘といった組み合わせを想像しながら、彼女に続いて歩いていく。

「成宮さん」

一階のステージに近い席に座る女性が、美和子に合図を送る。その左隣が二席空いているので、

そこが自分たちの席なのだろう。

莉子がそう推測していると、案の定、美和子は莉子に合図して彼女の隣の席に腰を下ろした。

「小泉さん、ご無沙汰しています」

——え？ 小泉？

聞き覚えのある名前に、隣に腰を下ろそうとする莉子の動きが一瞬止まる。

ありがちな苗字なのだけど、日々価値観の違いから苦手意識を抱いている上司と同じなことに、警戒心が働く。

「この子が、先日お話しした姪の莉子。自慢の姪よ」

美和子が莉子の膝に手を置いて言う。

一段と照明が落とされていく中、莉子は相手の女性に会釈する。

美和子の向こう、前屈みになってこちらに微笑みかけてくる女性は、見るからに温厚で優しくうだ。

——大丈夫、あの冷徹御曹司とは、似ても似つかない。

「初めまして、小泉知沙希といいます」

周囲を気遣い控えめな声で自己紹介をする女性は、次に体を反らして隣の連れを紹介する。

「こっちは、私の息子の司冴と言います」

彼女の右隣の男性がこちらに顔を向けた。

無言のまま軽く会釈をする男性の顔を見て、莉子は「ヒッ」と、息を呑んだ。

——ぶ、部長っ！

開演直前でかなり暗くなっているが、自分の上司を見間違うはずがない。

苗字を聞いた瞬間、一瞬頭を過った嫌な予感がまさか的中するとは……

目を見開き硬直する莉子と違い、司冴はこちらに関心を示すことなく前を向く。

「愛想のない子でごめんなさいね」

「あら、親の趣味に付き合ってくれるだけ良い息子さんよ。ウチの息子たちときたら……」

「でも成宮さんには、こんな可愛らしい姪御さんがいらつしやるじゃない」

美和子たちのたわいない会話を、ブザーが遮る。

「始まるわ」

どこからともなく聞こえる囁き声と、控えめな拍手の音。

誰もがこれから始まる夢のようなひと時を心待ちにする中で、莉子一人が悪夢の始まりを感じていた。

舞台は、中世ヨーロッパ。

真実の愛を求める男女の物語が、歌やダンス、往年のファンの笑いを誘うギャグを織り交ぜて進んでいく。

——私の乙女な思考の原点は、伯母さまのこの趣味にあるよね。

幼い頃から伯母に連れられて観てきた舞台の数々は、ヒーローとヒロインのドラマティックな出

会いで幕を開けて、どれだけすれ違っても最後は必ず真実の愛を見つけて終わっていた。

それを最高の歌とダンスで盛り上げていくのだから、乙女として懂れずにはられない。

ドラマティックな出会いから始まる運命の恋。それは、誰でも一度は夢見る懂れの展開なのただ……

——これは違う。

伯母たちの向こう、母親の隣で姿勢良く座る司冴の様子を窺^{うかが}って、莉子は首を横に振る。

無表情に舞台を眺める司冴が、莉子に意識を向ける気配はない。

——もしかして、私が誰かわかってない？

よく見れば、今日の彼は眼鏡を掛けていない。

コンタクトにしている可能性もあるけど、眼鏡をしていないため、いつもより視力が低く、薄暗い中では相手の顔がハッキリ見えていないという可能性もある。

目が合ったのはほんの一瞬だったし、今日の莉子は、職場にいる時とはかなり異なる装い^{ようい}をしているので気付かなかったのかもしれない。

——だとしたら舞台が終わった後、速やかに撤収すれば、私だとバレずに済む。

このまま男性と目を合わせるのも恥ずかしい初心^{うぶ}な娘ということにして、司冴と目を合わせることなく立ち去れば大丈夫だろう。

幕間で明るくなる間は、一度席を外して、照明が落ち始めてから戻ってくればいい。

——よし。この作戦でいこう。

どちらかと言えば楽観的な性格をしている莉子は、自分なりに考えを纏^{まと}めると、後は舞台を楽しむことにした。

そうやって舞台に集中していると、時間は一気に流れていく。

ミュージカル調の演劇が終わると、長めの休憩時間を挟んでダンスパフォーマンスへと切り替わる。

「すみません。ちょっと……」

「あら、莉子」

休憩に入るなり素早く席を離れようとする莉子に、美和子がなにか言おうとするが、気付かぬフリでその場を離れる。

背後で美和子が「あの子、照れてるのかしら」なんて言っているのが聞こえたが、幻聴だと信じたい。

なんにせよ、そうやって計画どおりに休憩時間をやり過ぎし、全てのプログラムが終了し、数回のカーテンコールを経て夢の時間が終わると、莉子は俯^{うつむ}いたまま席を立とうとした。

「伯母さま、早く……」

莉子の声を遮^{さへぎ}るように、美和子が、隣の小泉親子に声をかける。

「小泉さん、この後姪と一緒に食事をする予定なんですけど、良かったら一緒にいかがかしら？」

「……え？」

思いがけない伯母の提案に、莉子は思わず司冴を見た。

彼の方とは言えば、莉子と目が合ってもこれといった反応を示さない。

おそらく目の前の女性が自分の部下であることに、まだ気付いていないのだろう。

でもさすがに一緒に食事をすれば、誤魔化しきれなくなる。

「伯母さま、急にお誘いしても……」

いつもより声のトーンを高くして伯母に囁く。

その莉子の声を、小泉夫人の陽気な声がかき消す。

「あら、ちょうど私も成宮さんをお誘いするつもりで、お店も予約してあるんですよ」

「まあ嬉しい」

はしゃぐ美和子の声に、莉子は頬を引きつらせた。

自分の上司と席が隣合わせのだけでも、ありえない偶然なのに、その上に一緒に食事に行くことになるなんて……

もし神様がいるのなら、これは喜劇の始まりなのかと聞いてみたくなる展開だ。

チラリと司冴の様子を窺えば、母親の話し相手をしていてこちらに意識を向けていない。

プライベートのためか、母親と話す彼の表情は穏やかで、オフィスで見かける冷徹御曹司といった雰囲気はない。

——部長って、意外に鈍いな……

小さく呆れつつ、それならそれで、頑張ればこの場をどうにか切り抜けられるのではないかと、莉子は気持ちを立て直した。



劇場から予約を入れていたホテルのレストランに場所を移した小泉司冴は、改めて自分の向かいに座る板倉莉子の様子を窺う。

今日の彼女は、オフィスで顔を合わせる時とはかなり異なる装いをしている。

服装のセンスに始まり、メイクも髪型も別人レベルで違っているが、どれだけ着飾っても、好奇心旺盛な仔猫を思わせる黒目がちな目や、スッキリした卵形の輪郭、鎖骨の美しさが際立つほっそりとした首筋といった素の部分はそのままで。

そもそも、自分の部下を見間違えるわけがない。

だと言うのに、彼女は終始、口数少なく他人行儀に接してくる。

ついでに言うと、声のトーンが普段に比べてやたらと高い。

——まさか俺にバレてないとか、本気で思っていないかな？

わずかに乱視はあるが、司冴が職場で眼鏡をしているのは、気持ちを切り替えるためというのが一番の理由だ。

それにもし本当に視力が悪くても、声で彼女とわかる。

直属の部下という関係性を抜きにしても、司冴にとって莉子は、それくらい存在感のある女性なのだ。

それなのに彼女ときたら、伯母の手前だからか、他人のフリを決め込むためか、やけにおとなし
いので笑えてくる。

——まさに借りてきた猫ってやつだな。

司冴はさりげなく口元を手で隠し、笑いを噛み殺す。

——もしかして板倉君は、これが偶然を装った見合いであることに気付いていないのか？

だとしたら、かなり鈍いし、相変わらず視野が狭すぎる。

司冴の方は、母親から『知り合いが、姪御さんを紹介したいと言っているの。もし気が合うよう
だったら、結婚を視野に入れたお付き合いをしてみては？』と言われていた。直接的な表現ではな
かったが、これが見合いだとすぐに理解した。

司冴にはそろそろ、小泉家に相応しい女性と結婚してほしいということなのだろう。

早くに実の両親を事故で亡くした司冴にとって、小泉家の父母は母方の遠縁にあたる。

自分を引き取り育ててくれた恩を考えれば、親が望む相手と結婚するべきというのはわかつてい
るが、今のところ司冴には結婚願望がない。

泉ホールディングスには、成り行きで小泉家の養子になった司冴が後継者を名乗ることを認めて
いない者も一定数いて、なまじ司冴が優秀なだけに、グループ内で軋轢を生む原因になっている。

もしこのタイミングで結婚したとして、司冴に付け入る隙がないのであればその配偶者に……と、
考える輩が出てきてもおかしくない。

場合によっては、本人やその家族の痛くもない腹を探って、相手に不快な思いをさせることにも

なりかねない。

だから結婚などまだ先の話だ。

タイミングを見計らって上手く断るつもりでいたのだが、その見合い相手として、自分の部下が
現れたのでかなり驚いた。

とはいえ、相手はイタゲンの社長令嬢。家柄の釣り合いを考えれば、十分ありえる縁談だ。

本人が隠しているようなので、司冴から話題にしたことはないが、莉子の親の家業は最初から承
知している。

——もともと彼女を最初に見かけたのは……

司冴が過去に思いを巡らせていると、知沙希が声を弾ませる。

「莉子さんは、本当におしとやかなお嬢さんね」

現実とはかなりかけ離れた評価に、司冴はグッと笑いを堪えた。

すかさず成宮夫人が返す。

「あら、普段はもつと賑やかな子なんですよ。司冴さんがあまりに素敵な男性だから、照れている
のよ」

その言葉に、今度は莉子がグッとなにかを堪える。

奥歯を噛みしめ必死に発言を堪える姿を見ると、中身はいつもの莉子なのだと、妙に安心してし
まう。

——なんだかな。

司冴が莉子を観察して苦笑している間も、ご婦人たちの会話は滑らかに進んでいく。先ほどの舞台の感想でひとしきり盛り上がったたり、それぞれ莉子や司冴の思い出話を語ったりと話題は尽きない。

非の打ち所がない優秀な子供として語られる司冴の幼少期とは違い、莉子の思い出話はなかなか楽しそうだ。

男きようだいがいる影響か、莉子は正義感が強い上はかなりおてんばだったそうで、友達がいじめられていけば、相手が上級生でも臆することなく意見していたのだという。

彼女のそんな行いを語る成宮夫人は、困ったものだと言いつつも誇らしげだ。

幼い頃の思い出として語るにしても、本気で莉子のおてんばぶりを恥じているのなら、見合いの席で話したりしない。つまり夫人は、伯母として天真爛漫な姪を愛おしく思っているのだろう。

その気持ちは、司冴にもわかる。

職場では立場上彼女に意見することも多いが、司冴としても、伸びやかで明るい莉子の性格を好ましく思っているのだ。

泉ホールディングスの御曹司などと周囲から一目置かれてはいるが、司冴は小泉家の養子にすぎないので遠慮が多い。

だから自分とは真逆の性格をしている莉子のことは、いつも意識していた。

「莉子さんは、普段どんなお仕事をされているの？」

大学卒業後、コネなどに頼ることなく就職し、日々仕事に励んでいるという話を聞いて、知沙希

が興味を示す。

おっとりとした性格の知沙希は、莉子がイタゲンの社長令嬢であることは承知していても、詳しい略歴までは知らなかったようだ。

それは成宮夫人も同じだったようで、頬に指を添えて『そういえば、なんだったかしら？』とでも言いたげな眼差しを莉子に向けている。

「し、仕事ですか……」

さすがに平静を装いきれなくなったのだろう。

動揺した莉子の手からフォークが滑り落ち、刺さっていた肉ごと床で跳ねた。

「あらっ大変」

成宮夫人が小さく声をあげて、テーブル端のボタンに手を伸ばす。

個室で食事をしているので、用がある際はそれでスタッフを呼ぶ仕組みになっている。

司冴は、とりあえずナプキンを手にはち上がり、莉子の側へと回ってしゃがみ込む。

フォークを拾い、落ちた肉片をナプキンで包み指を汚さないよう回収する。そのついでに莉子のワンピースが汚れなかったかと視線を向けると、彼女の顔が間近にあって驚いた。

それは相手も同じだったようで、司冴と目が合った莉子が「ヒッ」と、喉の奥で小さな悲鳴をあげる。

よく見ると彼女は、片方の手でテーブルを掴み、もう一方の腕を伸ばして椅子に座った姿勢のままフォークを拾おうとしていたらしい。

深窓の令嬢にあるまじき姿だ。

咄嗟のことに動揺して、うっかり素が出てしまったようで、彼女越しに成宮夫人がおでこに手を当てているのが見える。

——こんな格好、この前もしていたな。
それを思い出すと、妙な悪戯心が働く。

「君は視野が狭すぎる。もう少し落ち着きを持った振る舞いを心がけてはどうだ？」

いつぞやのやり取りを思い出して、揶揄い交じりで投げかけた司冴の言葉に、莉子はみるみる顔色をなくしていく。

いつも迷いなく強気な彼女が見せる初めての表情に、笑いがこみ上げる。

「ぶちよ……これ……あの……」

自分にしか聞こえない声でゴニョゴニョ話す莉子の姿を見て、司冴は中途半端な状態に伸ばしたままになっていた莉子の手を取り立ち上がる。

そしてそのまま、わざとらしいくらい爽やかな微笑みを添えて語りかける。

「莉子さん、よろしかったらこの後二人でお茶でもいかがですか？」

司冴としては、これはちよつとした悪戯心で、ここまですればさすがに笑ってくれると思ったのだが、莉子の表情は青ざめていく一方だ。

「はい。……喜んで」

莉子は、ちつとも嬉しそうじゃない顔で答えてうなだれる。

隣の成宮夫人が「この子ったら照れちゃって」なんて莉子を茶化しているが、そういうことではないだろう。

司冴は普段見ることのない彼女の反応に、どうにか笑いを囁み殺した。

駆け付けたスタッフにナプキンを渡し、新しいカトラリーを頼むと自分の席に戻り、蒼白になって俯く莉子を眺めた。

——まさか本気で、俺にバレていないと思っていたとは……

その事実気付くと、いつも威風堂々と生きる彼女が、急に危なっかしい存在に思えて目が離せなくなる。

——もう少しの間、普段とは違う彼女の表情を見ていたい。

相手に迷惑をかけないためにも、最初から断わるつもりでいたはずの見合いなのに、急にそれが惜しくなる。

自然と己の胸に湧いた欲求に、司冴自身が戸惑う。

遺児になった自分を引き取り、なに不自由なく育ててくれた今の両親に恩返しするためにも、司冴はただひたすら勉強や仕事に励んできた。そのせいで、かなり執着心の薄い性格に育った。

そんな彼にとって、今不意に莉子に対して抱いたこの思いは、なんとも言えないくすぐったさがある。

その感覚をすぐに手放す気にはなれず、司冴はこの後どんな話をしようかと考えながら食事を続けた。

先に帰ると言う伯母と小泉夫人を見送り、食事をしていたレストランから、同じ館内にあるラウンジに場所を移した莉子は、一人掛けのソファーに向き合って座る司冴に深々と頭を下げた。

「今まで黙っていてすみません。実は私の父はイタゲンという会社を経営しておりまして……」

なにをどう話すべきかわからないけど、まずはそこから語るべきだろう。

そう考えて、自分の家族について話し出そうとした莉子を、司冴が遮る。

「最初から知っているよ」

「はいっ!? 最初って、どういう意味ですか?」

思いがけない言葉に、莉子は目をパチクリさせた。

そんな莉子の反応を見て、司冴が小さく笑う。その表情は、オフィスで冷徹御曹司として恐れられている彼とは、まるで別人だ。

——眼鏡を外すだけでずいぶん印象が違う。

莉子が妙な感慨を抱いていると、司冴が呆れ声で言う。

「職場で顔を合わせる前から、君のことはパーティーなどで見かけていた」

そう言われれば納得はいく。

泉ホールディングスの後継者である司冴はもちろんのことだが、莉子も時折、イタゲンの社長令

嬢として公の場に出席することはある。

莉子は気付いていなかったが、どうやらそういった際に、自分たちは顔を合わせていたらしい。

「さすが部長、すごい記憶力ですね」

素直に相手を賞賛して拍手する莉子に、司冴が苛立ちの眼差しを向けてくる。

凡庸な莉子からすると十分尊敬に値する記憶力なのだが、司冴にとっては、それくらい当然のことなのだろう。

「覚えてなくてすみません」

莉子が肩をすぼめて謝ると、司冴は前髪をクシヤリと乱す。

「……とりあえず、プライベートな場でその呼び方はやめてもらえないか」

確かに休みの日まで部長と呼ばれては落ち着かないだろう。

「では、小泉さん」

「……」

莉子が呼び方を改めると、司冴が肩を小さく上下させた。その仕草が、呆れているというより、寂しげに見えるのは、莉子の思い過ごしだろうか?

——気のせいだよね。

このやり取りのどこにも、彼にそんな表情をさせる理由はない。

「改めてになりますが、小泉さん、ありがとうございます」

「……なにが?」

ペコリと頭を下げる莉子に、司冴が納得のいかない顔をするが、お礼を伝える理由はちゃんとある。

「私の家のことを承知で、普通に接してくれていたんだなと思って。それに家のこと、黙っていてくれたわけですし」

良くも悪くも、イタゲンの社長令嬢という肩書きは、莉子の人生について回る。

それでも板倉莉子一個人として評価してほしいと思うから、社会に出て働いているのだ。

だから、素性を知った上で莉子を一社員として扱い、日々小言を口にしていた司冴の対応が嬉しい。

ソファアの肘掛けを利用して頬杖をつく司冴は、莉子の意見に露骨に顔を顰めた。

「私、なにか間違ったことを言いましたか？」

普段から相容れない仲ではあるが、今日の彼とはいつも以上に会話がかみ合わない。

「君は、お人好しがすぎる。そんなんだから、家族に騙されて俺と見合いさせられる羽目になるんだ」

司冴の言葉に、莉子は目を丸くする。

「え、これお見合いだったんですかっ！」

莉子としては伯母の観劇に付き合った先に司冴がいて、偶然の巡り合わせに驚いていたのだけど、違ったらしい。

「まあ俺も、相手が君だということは知らなかったがな。母からは、『知り合いが、姪御さんを紹

介したいと言っている』『気が合うようだったら、結婚を視野に入れたお付き合いをしてみては？』と言われていた」

司冴が、結婚を視野に入れたお付き合いとやらをする場合、その相手である莉子も同じ考えを持っておく必要がある。

そうなればこれは、見合い以外のなものでもない。

——そういえば……

先日、断られるのを承知で見合い話を持ってきた伯母は、莉子が興味を示さないとわかれば、あっさりその話を引っ返めて今日の観劇に誘ってきた。

その時彼女は、なんと言っていただろうか。

——今は時代が違うから……関心を持てる相手と巡り合わせるくらいに……

先日の会話を思い出して目眩を覚える。

あの時の見合い話は、莉子の気を逸らすためのフェイクで、美和子の狙いは最初からこちらにあったのだ。

そして、観劇に誘われた後の買い物や今日の一連の流れを考えると、この目論見には自分の母も少なからず加担しているのだろう。

「やられた」

そんな裏があるとは知らず、司冴が自分に気付いていないことを願って、あれこれ小芝居した後だけに腹立たしい。